

佳作

最後の青春

岐阜県 多治見西高等学校一年 前川 結芽

私がこれまでで一番感動したことは、中学三年生の音楽会です。目標に向かって進めば結果がついてくることを感じさせてくれた約二ヶ月間でした。

私は一年生も二年生も指揮者をしました。三年生も当たり前のように指揮者しようと思っていたが、数週間前にオーディションをした学年合唱の指揮に落ちてしまい自信をなくしてしまい学級合唱の指揮をしようか迷っていました。ですが、担任の先生が、「先生はあなたの指揮が好きです。あなたの大きく気持ちよく振る指揮が見たい。」

と言ってくれて指揮者として最後の音楽会で金賞を取りたいと思ひ指揮者になりました。

中学三年生にとって最後の音楽会。みんなで行く最後の行事でした。曲決めやパート分けは順調に進んでいきましたが、中間発表までの合わせ練習で男女でのパートの考え方の違いや曲に対する想いがバラバラで気持ちの違ひの差が大きくなってしまいました。こんなんで金賞という目標が遠のいてしまうと思ひ私は一度みんなで

話し合うことを提案しました。多くの意見があった中で共通していたことは、下級生、全校の先生、中間発表で見に来てくれる保護者全員を圧倒させる合唱をし、金賞を取り全校一を勝ち取ることでした。そこでもう一度みんなの思いを一つにし、あと少しである中間発表に向かいました。

中間発表当日、冬に近づく秋の寒さもあり体育館全体が緊張と共に凍っていました。初めて聞く他のクラスの合唱は思っていた予想をはるかに超え自分のクラスの合唱との差を大きく感じさせる合唱でした。それは私だけではなくクラス全員が思っていたことでした。

音楽会まで残り約四週間、まず歌詞をもう一度読み直すことから始め、歌詞が伝えたい思いを考えました。どこを強調させ、どこを弱くさせるのか考えるときにも、指揮者である自分はみんなをどうやってリードするのか音楽科である担任の先生と話し合い、伴奏者と指揮者、歌っているみんなと一体感のある合唱ができるように自分から各パートに声をかけにいき、それぞれがどのように歌っているのかコミュニケーションをとりながら、指揮でどうやって表現するのか考えることにしました。クラスの合唱が出来上がってきた頃に他のクラスや他の学年と合唱交流をすることになり、私たちは楽しみとドキドキが混ざった中で交流を開始しました。

自分のクラスの合唱が変化するとともに、他のクラスも中間交流とは違う歌い方や工夫をしていました。初め

て見た他の学年の合唱は言葉を失うほど上手で、交流回数が増えていくにつれて本番までの時間のなさに不安が溜まっていききました。

「もう金賞は無理でしょ。」

と言う仲間もいました。私も正直金賞を取ることはできないと諦めていました。けれどある子が、

「目標を決めたからには最後まで諦めてはいけない。諦めたらそこで試合終了。」

と、どこかで聞いたことのあるセリフをみんなの前で言い、私たちはゴールまで頑張ることに決めました。残り一週間は他のクラスとの交流はせず、校長先生や教頭先生など主に第四学生の先生に私達の合唱を聞いてもらい、どこをどうすれば良いのかアドバイスをもらい取り入れていくことにしました。本番まで二日前、最後の追い込みをするともに審査員の一番トップの人に合唱を聞いてもらうことにしました。先生からの声はかなり辛口でした。アドバイスも一つだけではなく数多くありました。でも最後の音楽会、悔いなく終わりたいと思ひ全ての意見を取り入れました。そんなに甘くはないと思ひ全体的にでしたが、本番一日前、朝みんなが来たら、休み時間は絶対一回はみんなが歌っていました。その日は一日がいつもよりあつというまに過ぎていったような日でした。

音楽会本番、やれることは全てやりきることができた、みんながそう思っていたと思ひます。最後の円陣のときみんなが緊張していたはずなのに本番ではそんなのを感じ

じさせないくらい笑顔で生き生きと歌っていました。私も楽しく指揮を振りました。

運命の結果発表、みんなの手をつないで「金賞は三年五組」という言葉を聞きました。待ち望んだその言葉を聞いたときは涙が止まりませんでした。私はステージでトロフィーを手にし、嬉しさを噛みしめました。教室に戻り、もう一度合唱をし私は仲間へ感謝をしました。

「自信を無くしていた自分に改めて指揮をする楽しさを教えてくれてありがとう」。照れて言えなかったけど本当は言いたかったと思ひます。目標に向かって合唱を笑顔で続けたその先に、新しい楽笑を作り上げることができました。私にとってあの四分二十秒は、みんなを圧倒させることができたと思ひます。一つの青春をさせてくれてありがとう。